

全国測量で二回岡垣を訪れた伊能忠敬

岡垣歴史文化研究会 石井 邦一

伊能忠敬は、わが国最初の日本地図「大日本沿海輿地全図」を作成した人物である。

彼は、この地図を作るため、寛政12(1800)年4月からの奥州街道と蝦夷地測量をきっかけに、以来、文化13(1816)年の江戸府内の測量まで、前後17年間を全国の測量を行った。その成果が、冒頭の日本地図である。

この壮挙が特筆できるのは、幕府の許可を得て測量行に着手したのが、この時代ではすでに老境とされていた、56歳のときだったことである。

忠敬は、上総の生まれで18歳のとき、下総国佐原村の豪農伊能家を継ぎ、傾いていた家業を立て直し、40歳のころには、家運を豊かにし、困っている人を援けた。

50歳で家を長男に譲り、隠居すると江戸に出て、19歳も年下の幕府天文方の高橋至時入門、天文・曆学・測量術を学んだ。

学び終えた彼は、56歳で、先に

書いた蝦夷地測量を手掛けた。

忠敬が、全国の測量をなし終えたのは、72歳のときである。隠居の年齢でありながら、精神的に酷寒・酷暑に耐えながら18年間を測量行で踏破した業績は、古今に例のない偉業と言える。

彼がこの測量行で最初に福岡の地へ足を踏み入れたのは、今から207年前の文化6(1809)年12月27日で、このときは、下関から船で小倉に着き、豊前路を京都郡から企救郡を回り小倉に戻っている。

測量隊は、前後6回にわたって福岡藩領内の測量を行っているが、岡垣を経由したのは5回目の福岡入りで、文化10(1813)年10月に肥後・肥前・豊岐・対馬を経て肥前小城から福岡・赤間・海老津・芦屋・飯塚・秋月・大熊・香春を測り、小倉城下で九州測量のすべてを終了している。この2回の岡垣測量の記録を、忠敬が書いた「測量日記」から伺ってみよう。

①文化九年七月廿五日 朝晴天、

先手七ツ半後(午前4時半)に、後手六ツ後(午前6時)芦屋浦出立、後手我ら五人、同所〇印より初め、芦屋浦、遠賀の松原、うづ原の里糠塚村、矢矧川水なし黒山村、吉木村、吉木川砂川十五間、手野村字手ノ浜、先手初まで測、(一里二十八丁二十七間三尺)原村ノ内波津浦、昼休庄屋平十郎、それより乗船して鐘崎へ着：

②文化十年十月五日 晴天、六ツ時前後、赤間村出立、手分、先手、福岡街道を測る、我ら五人遠賀郡上畑村、昨日打上〇印より初め、芦屋道測る。枝笠松、矢矧川石橋二間、海老津村、左三十間ばかり上に祇園社あり、小休百姓平右衛門、矢矧川土橋五間、山田村同所、石橋四間、左三十間ばかり森中に鎮守八幡の社、祭神国常立尊・神功皇后・応神天皇、糠塚ムラ、仮立場(休憩所のこと)、右側尾崎村左側



▲旧唐津街道から山田の集落を望む

芦屋村枝粟屋人家二十六軒、右側鬼津村枝小鳥掛地先左右芦屋村、名所岡ノ松原：

以上が「測量日記」の岡垣に関連する部分である。最後にこの測量隊の編成について触れておこう。

幕府測量方の忠敬以下、助役1人、下役3人、弟子3人、侍3人、あと竿取、中間など合計18人のほか、測量予定地の村役人(庄屋など)に対し、人足8人、馬7疋、長持運搬人の提供を事前に要請している。